

# 好きなことを無理しないでする

田中勝美

## 1. 第二の人生スタートへの経緯

定年退職が近くなったとき、このまま現在の勤務先に残って、第二の人生を送るに際して、職場で仕事を続けたいかという声がかかるようになると、ひとまずの安堵感とそれで良いのだろうかという相克感が、自分の頭を占めるようになりました。しかし、実際は1年前から定年後も職場に通うことが可能なように、職場に通勤可能な場所に親子で住宅を購入し、定年後の準備はすっかり整っていました。そして、定年前に当たる最後の1年間はその住宅から職場にも通勤していました。

職場の関係から、横浜市出身のわたしは、家族共々西は長崎、北は山形と全国各地を7回あまりの転勤生活で過ごしました。もっとも、この回数は同僚に比べて少ない方かもしれませんが、とはいえ、腰を落ち着けて1カ所に生活してこなかった生き方が、定着して生活することに対するかすかな不安のようなものが、前に述べた相克感ではなかったかと思えます。

誕生日は5月でしたので、身の振り方を考えるのは年が明けて決めればよいと、自分をせつついた気持ちにすることはできませんでした。最後の転勤先は、水戸から東京でしたが、実は任地としての水戸勤務は2度目であり、前回の勤務の際、ここに小さなマンションを購入していました。そして水戸から他の土地への転勤の際は、家族を置いて単身赴任を9年間続けました。その間、2人の娘は大学を卒業し職場を東京に求めて巣立って行きました。妻は水戸に定着し、わたしか妻が月に1回程度、水戸と赴任先とを往復していました。定年前に東京へ転勤した時には、日常は川崎の住宅から職場に通い、週末になると、水戸へわたしが帰る生活が1年間ほど続きました。

年が明けて、いよいよ定年延長を選択するか否か、決断の時期が迫っていました。その頃、水戸に帰ってくると、水戸で企業経営しているわたしと同年の女性が、妻とわたしの良き友達でした。彼女が、わたしたちに、自らの企業経営の喜び苦しみ、成果を上げる楽しみなどをよく話してくれました。彼女は福島県出身で、茨城ではよそ者ですから、その意味では仕事上の苦勞も多々あったと述懐していました。

いまや自立する年とは到底いえないにも関わらず、彼女の大らかな話に、これまでの拘束された生活を省みますと、最後の人生は、妻と一緒に暮らそうという気持ちが強くなりました。そのためには、まねごとでも良い彼女の多様な生き方の僅かな部分でも、自分のものにできないだろうかなどという、生来の楽観的な考え方が芽生えてきました。それ以前にも地元の経営者から会社を終わったら来ないかという声もかかりましたが、この話は立ち消えになり、いつしか自立を目指すことに気持ちが傾いていました。このようにして定年前の「さて、これからどうしよう」と気持ちにやっとな踏み切りがつき、1991年5月に57歳で定年退職いたしました。

2回目の水戸勤務でおぼえたゴルフ三昧をしてみたいと、退職後の1ヶ月は、妻や友人などと週2回から3回、多いときには週4回もゴルフ場に通いました。しかし、ゴルフは自分の生活ではありませんから、わたしのような素人には、趣味の域をでないことにすぐ気づきました。そのような間に、会社設立を目指して準備を続けていました。そして、わ

たしができることは、中央の目で地域を見るのではなく、地域の立場で地域を見る業務をしたいというのが願いでした。つまり、30年余にわたる地域での経験と職域での経験をもとに、地域を対象にして情報活動を通じた考え方を地域に生かしたいと、いま思えば大変欲張りな考え方でした。会社設立に関しては、女性経営者や東京の企業に勤務する娘たち、そして傍らで庶務的な業務をこなしてくれた妻の尽力などが、大きな支えでした。さいわい、会社設立後は、わたしの考え方を認めていただいて、新入社員の養成業務やPR広報などの職域からの業務などをいただきながら、徐々に業務の間口を広げることができました。この業務は、定年前に仲良くしていた企業の支店長から推薦をいただいた定年退職された女性の能力が極めて高く、小規模の受注業務はこの人と、その他、前の職場のネットワークを生かして何人かの主婦の活躍によって業務を進めることができました。つまり、人材派遣事業がスタートの段階としての業務展開でした。この人たちに、当該企業・役所・公共機関などで、人材育成の講師として活動してもらったのです。

## 2. 新たな展開は研究調査業務でした。

茨城県ひたちなか市にある旧射爆場跡地は、国の頭脳立地法に基づく水戸日立地区の中核となる集積促進地域として指定され造成が本格化して、頭脳型産業の立地を図る計画が進められていました。この政策は、通産省の主導で全国にソフト産業の拠点づくりをめざすものでした。茨城県では、頭脳型産業を県外から誘致・振興を図ることを目標に、地域拠点をひたちなか市に造ることを計画していました。

この産業は、いわゆるコンピューターを始め、さまざまな機器に組み込まれるオペレーションソフトや、アプリケーションソフトの制作、あるいは、機器のデザインを始め、各種のパッケージデザインの制作など、製造業をソフト面から支援する企業群を指します。この産業の拠点を造ることによって、地域の産業構造をハードからソフトへに移行していくという考えに基づいて、通産省が全国的に事業展開しました。

今でこそ頭脳型産業という言葉は、ソフト産業という言葉で置き換えられますが、当時、アメリカ・サンフランシスコ近郊のシリコンバレーを見てきた学者や役人らが、この理解しがたい造語を生み出したものと思われまます。

茨城県では、このうち「デザイン支援拠点の立地調査」について地域振興公団に委嘱して、現存する「ひたちなかテクノセンター」に設けられているデザイン支援拠点であるデザインセンターの設立、業務内容、企業支援策、地域デザイン振興策などの調査を行うことになり、わたしは「ひたちなかテクノセンター」の主任研究員として、以後3年間、この調査を地域振興公団の職員をチーフに取り組みました。この調査業務に参加することによって、国の政策が実際に地方で行われる際には、どのような手順を経て実現するのかという課題を業務展開する中で、希有な経験をしながら理解することができました。

初年度は、頭脳型産業の立地を図る方策を検討する基本調査として、①茨城県におけるソフト産業の現状、②地域産業を支援するソフト企業の現状と今後の方向、③地域に集積が少ないソフト企業について、④企業の誘致にともなう都市機能の現状と展望などについて、ヒヤリングや現地調査、さらには先進地調査などを綿密に進めて、報告書としてまとめる作業をほぼ半年かけて行いました。また、報告書執筆の各段階で、現在の調査の内容が当初の目的に適合しているか、課題や問題点を整理して報告書に盛り込まれているかなど、

この調査のために組織された常陸那珂地区開発推進調査委員会（委員は企業、関係市町村・県及び国、学識経験者など）に諮問して審議された後、次のステップの調査に進むこととなります。こうした課程を経て年度末には一冊の調査報告書が作成されました。

この調査の結果、常陸那珂地区には製造業が大きな比重を占めますが、頭脳型産業の集積は進展が遅れており、特にデザイン産業の集積は、小規模なグラフィック企業が中心で、製造業を支援するプロダクトデザイン企業は、きわめてわずかではありませんでした。この結果を受けて、次年度からは常陸那珂地区開発推進調査デザイン振興方策検討調査委員会が設置され、わたくしはワーキンググループに所属して調査研究を行うことになりました。このグループは、千葉大学工学部の宮崎清教授を主査として、地域振興公団、ひたちなかテクノセンター、千葉大学工学部教官、院生、学生によって組織されました。

このグループでは、2年間にわたって、研究調査を進めましたが、初年度は、頭脳立地法に基づく頭脳型産業の集積促進地域（水戸・日立地区）におけるデザイン振興、デザインによる地域振興の方策をメインテーマとしました。この基本的な考えは、地域のデザイン振興策を進展するに当たっては、「生活者」「企業」「デザイン業」「行政」の四者の関連がデザイン主体として不可分であるとの仮説によるものでした。このため四者に対してデザイン・アンケート調査を実施して、この地域のデザイン意識を分析し、地域におけるデザイン振興方策の基本的方向をまとめました。

当時の報告書から抜粋しますと、①地域の生活者のデザイン志向は高まっているが、企業や行政は、概してデザインへの関心や取り組む姿勢が脆弱でした。また、デザインに対する社会的認知度が低いことも地域の特徴として顕著でした。②この現状を踏まえデザインに対する四者の共有化意識を高め、各主体が協力して基金・組織などを構築して目に見える形を表示する必要性を説きました。③デザイン振興方策を具体化するには、地域の自治体がデザインの重要性を認識し、デザインを活用するデザイン振興ビジョンを策定して四者の連携とデザインを支援する拠点、およびデザイン振興機構等を設立する必要性があるなどの提言を報告書にまとめました。

2年度は、地域振興に果たすデザインの役割を公共施設建設、環境・景観の保全、地域資源開発による地場産業の振興、街づくり、生涯学習や地域文化の振興、国際文化交流など、さまざまな分野にデザイン理念・方法の導入を図ることによって生活文化向上の要請に応えることが問われているという課題を提起しました。①デザイン支援拠点の必要性と課題・運営の問題点の指摘として、デザインへの関心を高め地域のデザイン活用策を提案する。②水戸・日立地区における四者が必要とするデザインニーズを分析して、デザイン支援拠点は、それに対応したプロダクト・グラフィック・環境のデザイン機能を保持すべきことを提案する。③デザイン拠点は、地域の生活文化の向上に資するための「デザイン調査研究機関」として位置づけて、上に述べた三つの領域（地場産業の振興・地域文化の振興・生活文化の向上）における支援機能を持ち、デザインニーズの課題解決を果たすことを目的とする。④デザイン支援拠点の事業内容としては、生活向上に役立つ具体化できる解決策を提示する。その上で、人材育成、啓発、普及、相談など地域のデザイン共有化意識の向上に役立つ実践活動を行う。以上のような内容の報告書が提出されました。

退職後の3年間は、このようにしてあっという間に過ぎ去りました。この間、夏休みを利用して宮崎清先生の地域デザイン計画の実践地区である新潟県高柳町、福島県三島町、

青森県稲垣村の3ヶ所へ、ゼミ学生の研修に同行して現地における実践研究活動の方策を学びました。実はこれが後になって非常に役立つ研究方法になりました。

### 3. 社会人大学院生になる

常陸那珂地区開発推進調査デザイン振興方策検討調査委員会の委員長は、茨城大学人文学部の帯刀治教授でした。わたしたちは、全体会議で報告する内容について、その都度、大学に先生を訪れて事前説明を行っていました。それは、退職3年後の冬のことでした。例によって大学に先生をお尋ねし事前説明を行ったあとの会話のなかで、「今年度から人文学部にも地域政策専攻課程の大学院が設置されることになり、社会人大学院生の募集を始めことになりましたね」という話に思わず、「わたしのような老年でも受験の可能性がありますか」と聞いてしまいました。なぜなら、この3年間の調査研究の業務が、地域の課題を考える場を広げてくれたことと同時に、地域を見る目をより深化したいという欲求が強くなったからでした。「受験資格はありますから、試験を受けてみてください」というのが先生の回答でした。その夜、妻と相談した結果「自分の行いたいことの範囲が広がるなら受験してみたらどうですか」ということになりました。

幸い受験には合格し、大学院生と企業業務の二股かけた生活が始まりました。地域政策専攻課程の院生は、社会人と学部卒業生の混合チーム。当初はごちない面もありましたが、時を経るに従い相互関係もうまくいくようになりました。講義では、これまでの常識が覆されたり、新しい知識の導入があったり、職場とは異なる新たな感覚が付与される気持ちでした。

大学院での日常生活にも慣れてきたころ、地域総合研究所の一階に生涯教育研究学習センターがあり、そのなかでも長谷川幸介助教授の研究室には、講師としての学内の先生や部外の人々が数多く集まり、専門的あるいは時事的な課題や問題が話し合われていました。わたしはその人々の話しの中に、先端的な内容や現在の課題が含まれているのを理解し、知的な刺激を何度受けたか分かりませんでした。大学で学んだ講義はともかく、この研究室で得るものがそれにも増して大きかったことを実感しました。

この年、財団法人広域活性化センターによって、埼玉県神泉村を対象にした地域観光開発について調査委員を委嘱されました。この調査は、現地調査にこれまでも当たってきた早稲田大学グループが中心になって行うことになりました。千葉大学の宮崎清教授も調査委員になられ、またお会いすることができましたが「デザイン振興調査」の熱気をこの調査では感じることはできませんでした。

大学院2年次になると、長谷川先生を講師に、常陸太田市で地域づくりグループの「まいづる塾」のみなさんに紹介されて、このグループが進めていた地域づくりの課題である「地域資源の発見」作業と一緒に考え、地域資源マップづくりに協力しました。「まいづる塾」グループとは、その後もしばしば課題によって講師として参加したり実践活動をしてきました。特に西金砂郷神社が、60年に1回開催する大祭礼をテレビ中継するということに手をかして欲しいといわれた時には、現地で話を聞いてビックリしました。確かに、機材は立派なものがそろっていることにも驚きましたが、それ以上に、これまで一度もテレビ中継したことがないというのを聞いて2度びっくりしました。熱意はともかく、人間知らない世界のことは怖くないとはこのことだと思いました。それでもグループのみなさ

んの熱意と創作意欲によって、中継も無事に終わりテープ制作も完成しました。来年は「映像制作を考える講座」の講師として交流します。

#### 4. 箱物ブームを素材に修論作成

話をもどしますが、院生の2年次には、修士論文を記述することになっています。そのための課題の提案を1年次の後期から求められていました。わたしは、在職していた職務経験を生かし、なおかつ、その頃各地の市町村に文化施設としてのホール建設が盛んに行われていた状況に鑑みて、「地域における文化施設のあり方」を修論のテーマにすることにしました。

当時、地域市町村のホール建設ブームが全国的にみられました。文化ホール建設について、さまざまな論議が交わされていましたが、その論議の中心は、箱物をつくってみたが中に盛り込むソフトの部分は、どうするのかという課題でした。つまり、そこで交わされた論点は、多目的ホールか、専門ホールかという問題です。茨城県では水戸市が建設した「水戸芸術館」が、全国的な反響を呼び起こしていました。芸術館では専門ホールを作って、音楽・演劇・美術の各部門では、独自の制作を行うことを基本にしていました。そのため財政的には市の予算を事業費にする方策を取り入れるなど、先駆的な事業展開が考えられていました。当初はこの方式が実行されてさまざまなところで高く評価されていました。在職時代にわたしは、芸術館の評議員をしていましたので、水戸市の他、岸和田市、尼崎市が、全国の市町村でこのような試みを行っていることを知っていました。

この方策は、ホールのアイデンティティを發揮するためには最良ですが、多くの市町村では、独自のソフト制作にまで力が及ばず多目的ホールの建設が主流でした。多目的ホールは、汎用性はあるものの「帯に短し襷に長し」の妥協を強いられる設備でした。したがって、当時においても同じようなホールが各市町村に建設されることは予算のムダ使い論として論議をよびました。こうした時代背景の中で、行政の文化化などという声とともに、各地のホールは建設されていきました。

市町村のホールの運営方策について、「水戸芸術館」方式は理想形と考えられましたが、各地に建設されているホールはそのようなわけにはいきません。わたしは、地域の文化ホールは、時間をかけても市民の自主制作グループの育成を図ることを呼びかけました。その理由は、地域に立派な文化ホールが建設されたとしても貸ホールとして存在するのは、中央文化が地域を席捲する場の提供としてのみ使われることとなります。地域が建設するホールは地域にふさわしい地域独自の文化発信の場に、ホールを通じて行うことをホール建設の目的にすべきではないかと訴えました。そのためには、地域に伝承されてきた文化資源を発掘・発見して、これを基に、市民が参加協力して役割分担を決めて、ホールの上演種目を制作しようと呼びかけた内容です。

この問題提起には、まず、県外からの反響を得て、新潟市民芸術文化会館の建設中に、同館の設計を担当した建築家長谷川逸子氏の依頼で、新潟市で「地域文化ホールの自主制作をどう考えるか」をテーマに講演しました。また、茨城県では、美野里町がホールの建設を進めており、茨城県生活文化課が美野里町で開催した講演会では「地域ホールの運営について」をテーマにお話しました。これらの講演では、地域住民が自分の地域を良く理解し、他の地域の人々に自分の地域を良く知ってもらうことが、地域の誇りにつながるこ

と述べ、自主制作のための地域資源の発見を展開して欲しいと要望しました。美野里町では、その後、東京の大学と共同でこの作業を行ったことを聞いています。なお、これをきっかけにして以後「財団法人いばらき文化振興財団」の評議員を務めることになりました。

修士論文のテーマを「地域ホールの自主制作について」と申請すると、帯刀先生が当時文化施設を建設中であった大宮町の調査をしてみてもどうかとお勧めを頂き、学部の学生と協同して調査研究に当たることになりました。作業は、大宮町文化施設建設準備室の担当者と始めに打ち合わせを行いました。調査内容は「大宮町ホールの活用策について」と決まり、町が要求する内容について具体的に検討し、調査内容を決めました。その結果、地域資源調査のアンケートとヒヤリング、地域住民の制作事業展開策、他地域住民の制作事業展開実態、多目的ホールの地域住民制作実態、今後の住民参加活動の展開などの項目を立てて、ほぼ、半年をかけて調査研究を行い修論発表と修論作成に当りました。また、大宮町議会委員会で帯刀教授とともに、調査報告書の内容を別刷りパンフレットを作成して説明しました。このようにして、2年間の大学院生活は終わりましたが、この間、学生同志の交流、北京・万里の長城・蘇州・上海などを巡る中国先端産業視察旅行など、充実した2年間を送ることができました。

## 5. 趣味が高じて仕事になった

大学院を修了した年は、教育学部の大嶋和雄教授とその後親しくお付き合いさせていただく機会が巡ってきました。大嶋先生が担当された教養講座に、長谷川先生の勧めもあって講義をすることになりました。講座の目的は、学部学生に一般的な教養意識を広く持ってもらう意図としての制限はあるものの、講義で取り上げる内容については制限しないということでした。そこで「70年代のロック・ミュージック」をテーマに、2回の講義を受け持つことにしました。この内容であれば、現職時代に行った経験でもあり、現に当時のレコードの多くも所持していたので、少ない準備期間で対応できることからお引き受けしました。

もう30年も前のことになりますが、今でも時折、インターネットのブログなどで、その番組名と共にわたしの名前をみる場合があります。当時のわたしは、多チャンネル化するラジオ番組の中で専門プログラムを番組化する事によって視聴者を創出したいとの思いもあって、FM放送で、プログレッシブロック中心の番組提案をしてオンエアしていました。聴取者は少なかったかもしれませんが、水戸からのローカル放送ながら関東全域から場合によると長野県など、常に熱心なリスナーに恵まれて幾度となくリスナーから教えられ、送り手と受けてのキャッチボールを番組を通じて行うことができ、あの時代のロック・ミュージック番組としてはユニークな制作ができたと思っています。番組経費も少なく身銭を切ってレコードを買い集めたり、毎晩、耳ヘレシーバーを被せてレドを聴き、資料となる本や雑誌を読みあさりましたが、趣味だからこそできたことで、単に仕事だったらこのような熱意が持続できたかどうか……今でも現役時代の楽しい思い出のひとつです。

そのような経験から、1回目はわたしが選んだ曲を用意し、2回目は学生のリクエストにも応える用意で臨みました。共用棟の大きな階段教室は満員で立っている学生の姿もみ

えました。大嶋先生の紹介を得て、わたしがロックを聴よくうになった動機、60年代から70年代へのロックミュージックの変遷、ロックミュージックへの偏見、表現としてのロックミュージック、ロックミュージックの風俗と社会現象など、その当時、ロックミュージックが背負っていた課題や問題点、現在から顧みる70年代などについて、当時のロックミュージックを教室に流し、その合間に話すDJ方式で講義を進めました。幸い2回の講義ともに満員の盛況で、リクエストや講義の内容についての学生の感想文も好意的なものでした。さらに、「ロックミュージックを聴く視点について新たな刺激を受けた。70年代のロックミュージックを聴いてみたい」などの意見がよせられました。中でもわたしを喜ばせたのは「あんたイカシテルヨ」という70年代と同じほめ言葉の感想文でした。

長谷川先生の研究室には、以前と同様にお邪魔しながら、县市町村などの自治体や民間団体などの生涯学習講座の講師に招かれたり、調査研究を行ったり、先生の業務の補佐的役割をさせていただきました。また、ここに集まる先生方と本読み会を持ち「日本列島と日本文化」への関心を強く持つようになりました。さらに、長谷川研究室でよく話し合いをさせていただいた先生方と一緒に調査研究をした「地域資源の発見と活用方策」は、5人の先生方と一緒に報告書を作成しました。この報告書は、県地方課の依頼を受けて企画制作されたもので、このあと、地域課題を考えるさまざまな場合の基本的な記述が盛り込まれています。

これより先、前述した「デザイン振興調査」で知り合いになった、地域のデザイン業界の人々と「茨城デザイン振興協議会」の結成に参画しました。また、茨城県テクノセンターが完成しそのデザイン室で、民間会社のデザイナーと机を並べて県内企業のデザイン相談に応じるデザインコーディネーターも務めました。

## 6. よく本が読めた！

教養講座をきっかけとして、大嶋先生との交流が親密になりました。大嶋先生とは、学生の表現力の欠如、勉学に取り組む意欲などについて話合う内に、環境教育の講義の一部を担当する気はないか。その気があるのなら、講義カリキュラムと講義内容を記述して提出して欲しいとの申し出を受けました。これまでの自分のしてきたことや学んだことが役に立つのであればと、それから半年間、社会学、民族学、文化人類学、社会環境学などの著作を参考に、講義内容15本の原稿作りを行いました。この中で代表的な図書としては、網野善彦「日本社会の歴史」ほか、赤坂憲雄「異人論序説」・「境界の発生」、中沢新一「森のバロック」ほか、鶴見和子「内発的発展論」、佐々木高明「日本文化の基層を探る」山口昌男「文化と両義性」などは、自分の考え方を整理する上で大変参考にさせていただきました。こうして、15本の講義原稿を大嶋先生に提出し、後期からは講義を行うことになりました。講義内容は、地域論、風景論、境界論、異人論、地域環境論などにまとめて、映像、図表など視覚素材を多く使い、理解の足しにしようと心掛けました。とはいえ、本はいつまでも読むことができるわけではなく、年を取ると目に負担がかかることまでは意識していませんでした。老婆心までに老眼が進まない内に読むことが大切です。老眼が進むと読書の持続力が奪われる気がします。

女性がユニークな企画で開催した「宮崎駿監督作品をどう見たか」は、長谷川先生、大嶋先生、それに、わたしの3人が、映画鑑賞会の後に、会場の参加者に語るというシュチ

エーションで、それぞれ別の日に開催されました。わたしの担当は「千と千尋の神隠し」でした。

わたしは、映画、演劇、音楽などを視聴した後で、なにかを直ちに語ることは、作者の込めた思いとは離れたレベルの話になるのでしり込みしましたが、市民の自主的な企画でもあり賛意を表して参加しました。わたしは、「千と千尋の神隠し」を民俗学の世界で捕らえることにしました。それは、赤坂憲雄さんの「異人論」や「境界論」を下敷きを利用していただき、千を「漂泊者」、千尋を「異人」と想定すると、「境界」を越えたこの人たちが、どのように扱われるかがよく分かります。映画では「境界」は、はっきりしていますが、現実社会ではこれが明確でなく、しかも、「定着者」の姿もはっきりしなくなっています。「境界」は、地域・土地ばかりではなく、男と女、生と死、大人と子ども、昼と夜、想像と現実などの人間生活の「境界」においても明確でなくなっています。「境界」が喪失しつつあるときに、物語は「境界」を明確にすることで、千と千尋の良き人間関係の回復を示唆しています。「境界」は、現代的には、けじめとして意識されることが大切ではないか、そのような話をした覚えがあります。会場の人々にも賛同を得られてホッとしたことがありました。

わたしが60歳になった10年ほど前に、次女が、アメリカのシリコンバレーに職を見つけて渡米しました。その後、現地でオーストリア出身のエンジニアと結婚しましたが、いまはもっぱら2人の孫育てをしています。その孫たちに会いに行くのが、今ではわたしたちの大きな楽しみの一つです。ところが、娘が結婚する前は、夫婦で娘に会いに行くと、娘の休日を利用して小旅行に出かけることにしていました。わたしにとっては、異人としてアメリカを見る目を養わせてくれる、よい経験をさせてもらったと思っています。

その最初の旅行先は、サンフランシスコから近いヨセミテ国立公園でした。ここで始めてアメリカの自然の雄大さを目にしました。しかも、美しい高山植物が乱れ咲く高原があったり、野生の動物を見る機会に恵まれたり、氷河が造ったといわれる岩壁の山々と深い溪谷、巨木レッドウッドの森など、日本では見る事ができない自然に圧倒されました。その後は、カナディアンロッキーをバンフからジャスパーまで車で走行したり、北カリフォルニアの海岸地帯に植生するコースト・レッドウッドやラーセンボルケニック国立公園などの海と山を楽しんだり、イエローストーン国立公園とお隣の映画シェーンの舞台になったグランド・テトン国立公園、そして極め付けは、カリフォルニア、ネバダ、ユタ、アリゾナ、コロラド各州の3500キロを走破して、キングスキャニオン、セコイア、グランドキャニオン、ザイオン、ブライスカニオン、キャピトルリーフ、モニュメントバレー、メサベルテ、キャニオンランド、アーチーズなど、サンフランシスコを起点とする国立公園めぐりでした。

わたしの見たアメリカの自然景観は、主として、氷河侵食・河川浸食のよるものでした。ヨセミテやカナディアン・ロッキーは前者ですが、残りは後者の造形です。そして後者のグランドキャニオンを始めとするプラトー (plateau) と呼ばれる高原状の平原は太古は海底でした。その海底がプレートの衝突によって隆起し、現在のような広大なプラトーになりました。このプラトーが、雨水や河川に浸食されるとメサ (mesa) と呼ばれ、プラトー (plateau) より規模が小さく周囲が急斜面で頂上が平らな地形になります。さらに、ビュート (butte) と呼ばれメサ (mesa) より規模が小さく孤立して周囲が切り立った丘



になる地形は、西部劇の舞台にもなるモニュメントバレーに多く見られます。この地域の国立公園は、このような地質上の造形変化によって、さまざまな色と形のバラエティーに富んだ景観を造っています。この頃になるとパソコンの扱いにもなれて、ビデオテープ編集や文字や音声の取り入れをして映像づくりができるようになり、映像作りを旅の風景や孫の撮影にまで範囲を広げています。

アメリカでも、開拓時代は猛烈な自然破壊が行われましたが、自然保護に理解のある人々が、イエローストーンの国立公園化を働きかけ、世界で初めて国立公園になって以来、自然保護に理解が深まり各地に国立公園が誕生します。アメリカの国立公園は管理がゆきとどいて、野生動植物保護が図られ、公園内の宿泊施設の制限や、キャンプ地の整備も良く行われています。アメリカの自然に偶然にふれたことから、自然保護と境界の問題として、講義の中で社会環境の課題として取り上げたことがありました。

大嶋先生とは、学生の研究成果を論文にして表現力を高めるには、ゼミの課題としてフィールドワークの必要性を提案し、秋田県六郷村の湧水・汽水湖涸沼・鹿島灘海岸線などを対象に調査研究を行い、数々の有益な論文ができ上がっていきました。こうした作業を継続することによって、学生の課題への取り組みが多層化、且つ深化して発表能力が向上しました。大嶋先生の献身的な指導によって、学生の論文が知事表彰を受けたり、学会で発表する論文も出現しました。また、長谷川先生の紹介などで、大学講師をしながら、各地の生涯学習の講師としても招かれました。特に記憶に残るのは、北茨城市生涯学習課が開催した「もうひとつの日本」の講座を3人の先生で担当した折でした。「山の民」の話の中で「箕作り」の話をしたところ、この地域にも箕をつくり・修理する人が、最近まで生活していたという話を聞き、時の流れは意外にゆったりしているという実感を得たことがありました。また、茨城県南東部に位置する鹿嶋郡行方郡を基盤にする鹿行広域地域一部事務組合から、地域の広域観光圏をアピールする上で、地域資源を活用した地域マップづくりの講師を依頼されて地域を紹介するマップ制作を提案する講座を1年間担当し、マップ作成の基礎的資料は、地道な地域資源の発見作業が必要であり、それは、聞き取り、歴史、民俗など地域の文献の活用が欠かせないことなどを力説しました。

2004年2月には、大嶋先生が茨城大学を退官されることになり、退官記念講義がありました。記念講義では、ご自分がおやりになってきたことから、大学で学生を育てた喜びを中心にお話しされました。教室には、先生の外部とのお付き合いの広さを感じさせる人々や、ゼミの卒業生などが大勢集まって最終講義に華を添えました。そのあと市内のホテルで卒業生を中心としたお別れ会が開かれて、わたくしも先生と一緒に卒業生に送別会をしてもらいました。わたくしが、大嶋教室での講師を、6年間も継続することができたのは、ひとえに先生や学生の暖かい支援があったからと深く感謝しています。

## 7. さいごに

わたしの退職後の生活の一端を書き記しましたが、この中で一番忘れてならないことは70歳までの13年間さまざまな人々との出会いがあったことです。もちろん、それ以前の在職中にも数多くの人々とお会いしました。しかし、在職中の出会いの中には、わたしの属している職場やその利害でお会いする方々も多かったと思います。しかし、第二の人生のお付き合いは、そのような利害関係だけでないのが普通でした。つまり、トクとかソソ

とかの関係をお付き合いの条件と考える必要はありませんでした。言い換えれば、自分がお付き合いしたい人と友達になることができる自由がありました。友達を選ぶ基準は、自分の物差しの基準であるヨイ・ワルイの判断で決めることができました。このような選択を自由にできることが、第二の人生の生き方の素晴らしさではないかと考えています。当然のことながら、友達になってもらうためには、こちらもそれなりに努力しなくてはなりません。その努力は、他人に管理された時間の意識をかなぐり捨てて、自分が自由に管理することができる時間の中で解決してゆくことではないでしょうか。

第二の人生の序曲をいつから奏でるかは、それぞれの人にとって異なるはずです。他の人と異なる生き方をしたいことを目指すのであれば、その準備期間に自分の人生の条件を考える時間があるかどうかによって、多くを楽しむことを可能にするかも知れません。その意味では、第一楽章以後を演奏するのはあなたです。そのためには、自分はどうしたいのかの回答を、自分自身の問題として解決する必要があります。それはきっと、あなたのこれまでの生き方とご自身の健康状態が、大いに関わって来るのだと考えます。

以上